

6.8 地すべり地、輪島千枚田

6.8 Unique Paddy Field Named as "Senmaida" Located in Landslide Area of Wajima

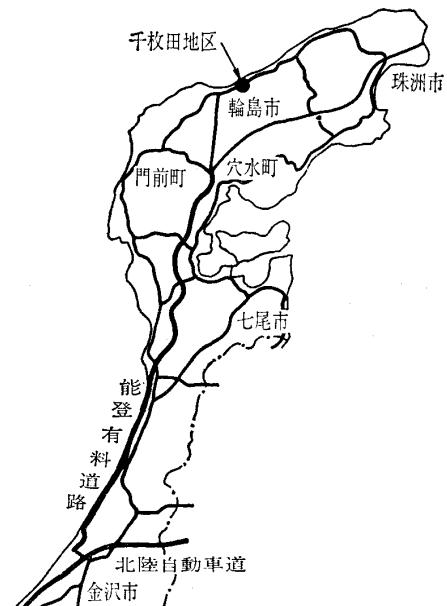
宮地 治 (みやち おさむ)
株宮地組

1. 地すべり地、輪島千枚田

能登半島の中心地、輪島市から国道249号線を東へ車で高州山の山裾を約10分、日本海へ垂直に落ち込んでいる、地すべり地形がつくりだした景勝地が、「千枚田」である。

輪島市といえば、輪島塗、朝市、御陣乘太鼓^{注1)}が、全国に知られた代表的な観光地ですが、近年、長い間の自然の流れとともにつくりだされた奇妙な地形は、数ある能登半島の観光地の中でも重要な資源と注目されています。最近、道路等周辺地の整備がなされて、新しい輪島市の景勝地になりました。

「千枚田」は、今から約700年ほど前に、土着民に



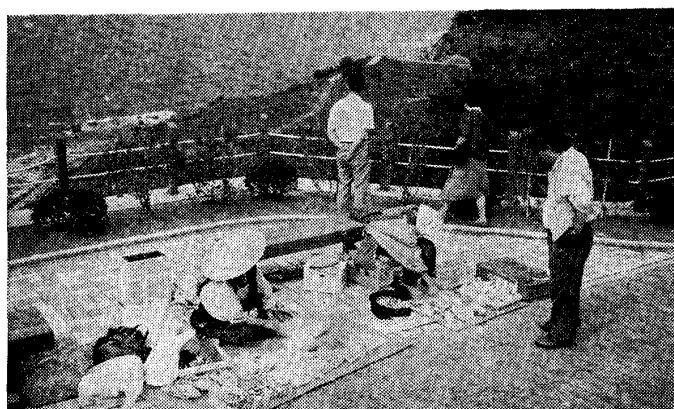
図一1 千枚田の位置

注1) 御陣乘太鼓：天正4年（1576年）、当時舳倉島、七ヶ島を領有し豊かな海の幸、山の幸に恵まれていた名舟村に七尾城を落とし破竹の勢いの上杉謙信が攻めこんだ。ところが武器を持たない村民たちは、これに対処するため、古者の指図に従い木の皮で不気味な様々の面をこしらえた。この急ごしらえの悪鬼せまる面をかぶり海藻の髪をふり乱し夜中に陣太鼓を先頭に謙信勢になだれこむと、思いもよらぬ怪物の夜襲に越後勢は驚いて退散したという。

よって、山裾の急斜面で惡条件にもかかわらず、水耕稻作のため、階段状に切り開いた棚田は、幾度となく、地すべりの被害に合いながらも、修復作業を繰り返しながら、現在の形状をつくりだしたそうです（口絵写真—15）。

「千枚田」の名称は、幕府の役人が、検地に訪れた時、田のあまりの小さいのと、数の多いのに驚き、枚数を数えてみることにした。数えてみると999枚もあり、台帳に面積ではなく数を書き入れて、次の地へ移ろうとして、蓑笠を取ったら、その下に1枚の田が隠れていたことから、1000枚田（千枚田）と呼ばれるようになった。また、地元民に伝えられる語り話には、その昔、田植を終えた百姓夫婦が帰りぎわに、田の枚数を数えてみたら、何度数えても998枚しかなく、不思議に思いながらも、蓑を取り上げたところ、下に2枚の田が隠れていたとも伝えられ、「蓑の下、耕し残る田2枚」の一旬に、面影が残されています。

現在、千枚田は総数約2150枚が耕作されていますが、通称は国道と海岸線との間に位置する田を「千枚田」と呼んでいます。一枚の広さが平均5.3m²です。中で一番小さい田は1m²のため、耕作には農



写真一1 千枚田遠景

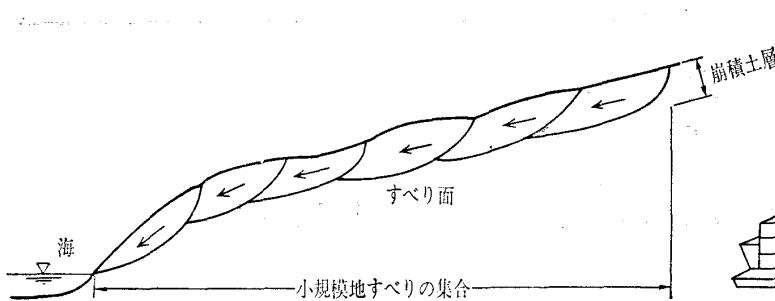


図-2 千枚田地すべり模式縦断図

器具が使えず、単位面積当たりの労力は、平地の数倍もかかりますが、地すべり地の特徴である粘土質は、逆に水利が良く、水田に適し、良質米が取れるところから、この地区は白米（しらよね）村と呼ばれ、現在の地名の由来となっている。

平地が少なく、狭い土地を、淡々と耕した農民の姿を今も、「千枚田」は、我が民族の活動力を感じられる。また、縄文土器に見られる造型模様をも偲ばせる美しい景観を示唆するところから、昭和31年に、輪島市の名勝地に指定されました。

かつては白米村には、塩田も盛んであった。寛永12年（1635年）の記録によると出来塩1295俵と記されている。また、延宝2年（1674年）には、13軒の内、百姓6軒、ほかの揚浜塩田7軒とも記述されているが、現在は、日本海の荒波に浸食されて、塩田は残っていない。

2. 千枚田地すべり発生機構

千枚田地区は、農林水産省所管理地地すべり指定地であり、以下のような機構で地すべりが、発生していると考えられています。

(1) 地形的には、明らかな地すべり地形を呈しており、棚田状の地形となっている点を考慮すると、一つの大きな地すべりが滑動しているのではなく、小規模な地すべりが集合している。

(2) 浅い表層のすべり面であり（地すべり層、厚さ約8m），地質状況から推定すると礫混じり粘土状を呈している、崩積土下面にすべり面が存在する。

(3) 地すべり滑動状況は、図-2に示すとおり層状のすべり面形態を有しており、人為的な切盛土がない限り主に斜面、下部から上部に、徐々に地すべり滑動が波及していく、後退型の地すべりと考えられる。

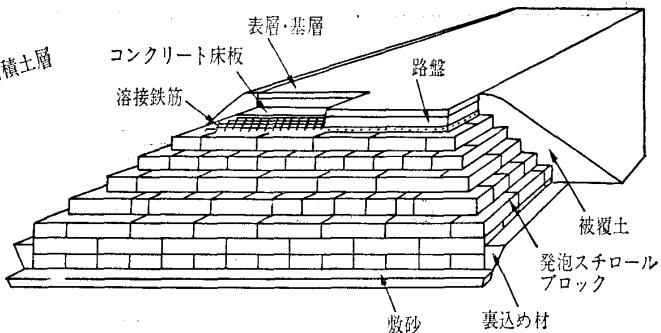


図-3 EPS 工法の標準断面図

3. 道路改良工事に伴う、EPS 工法の施工

一般国道249号線は、千枚田地区のほぼ中央を通じておらず、観光資源上からも、改良工事が困難なために、長年能登半島周遊の大きな障害となっていました。また、工事における小規模な盛土の場合でも、これが荷重増となり、地すべりが誘引される危険性が高かった。そのために、道路改良工事においては、工法の選定に苦労したが、超軽量盛土材として、発泡スチロールを使用する、EPS工法が採用され、昭和63年度着工、平成元年3月完成されました。地すべりの徵候ですら認められず、今日に至っています。

EPS工法は、ノルウェーで15年前から実施され、1985年に日本の軟弱地盤対策に、札幌で初めて採用され、その後、何件かの実施例は各地にあるが、千枚田地区のように、地すべり対策としてのEPS工法を施工したのは、日本で最初である。

4. 現在の千枚田について

道路改良後の千枚田は、幅員も確保され、ポケットパークも併設がなされ、観光シーズンには、以前にも増して、多くの観光客が訪れるようになりました。また、道路沿いには、輪島市内のような朝市で、近くのおばちゃん達の手作り民芸品が売られ、観光客の目を楽しませています。

貴重な観光資源を自然を壊さずに整備を進める、これから工事において、この千枚田工事は、我々が今後取って行かなければならない指針を、暗示しているように思います。

最後に、この執筆にあたり貴重な資料、ご助言を賜った、輪島土木事務所および関係各位に、深く感謝いたします。